

革命の新しいイメージ

マルクス・レーニン主義に代わるもの

江口 幹

一 ゴーシスムとは

ゴーシスムは、文字通り直訳すれば左翼主義となる。この言葉は、ちょうど今日の日本で過激派という言葉がそうであるように、多くの場合特に五月革命以降、最左派と見なされる人々をジャーナリズムが侮蔑的に呼ぶのに使われているようだが、もっと厳密にある特定の革命的潮流を指す意味でも用いられており、ここではもちろん後者の意味で使用することにする。日本では、ゴーシスムは普通、左翼急進主義と訳され、時には極左主義とされたり、新左翼という風に意訳されることもある。しかし、左翼急進主義では、いつの時代にもあったその種の傾向と同一視される恐れがあり、新左翼と違ってしまつては、現在の日本ではこの言葉が、事実上小スターリン党派でしかないものを指しているために、誤語としてはおよそ不適当ということになる。したがつてここでは、正確さを期し、ゴーシスムという言葉をそのまま用いることにしたい。

では、ゴーシスムとは何か。難しい、いろいろな議論を招く問いではあるが、これについてはリシャル・コンバンが実に明快な書物を書

いており、この稿では主として彼の所説に拠りつつ、ゴーシスムの相貌を明らかにしてゆくことにしよう。

コンバンによれば、ゴーシスムは、運動としてはいたるところに見られるもののまだ断片的な形にすぎないので、何よりも理論であり、現行社会についての、未来社会についての、両者の間の移行についての理論であり、完成にはほど遠い、形成途上の理論である。別な面からいへば、この理論は、過去半世紀にわたつて革命運動を独占してきたマルクス・レーニン主義への対策であり、しかも左からの対策である、と規定できる。

左から、と特にいうのは、マルクス・レーニン主義への対策はこれまでもなかったわけではないが、その大半は、社会民主主義、イギリス労働党、協同組合主義といった右からのものだったからである。確かに左からのもの、アナキズム、アナルコ・サンジカリズム、革命的サンジカリズムも存在した。しかしこれらは、十月革命以後、(スペインを除けば)現実の運動への影響力を失ない、ロシアとその同盟者へのかほそい批判者以上のものではなかった。「およそ五十年の間、マルクス・レー

ニン主義が分割することなく支配し、組織された革命運動のイデオロギ
ーの指導を独占していたこと」は事実だった。ここでは、モスクワに賛
成なら革命的とされ、批判的ならば反革命的とされた。

ゴースムは、こういう独善的な論法を破棄するものとして、マルク
ス・レーニン主義ときっぱり縁を切るものとして登場した。しかもこの
登場は、「永遠の真実を自任していたスターリン主義の絶対主義的な意
志に侵されていない活動家の世代が、成年期に達したのと同時に起きた
」。その意味で、ゴースムの理論は、「現に進められている闘争の表
現」であり、「拡大しつつある革命運動の理論」である。したがって、
ゴースムは現代の理論であり、現代という時代においてこそ発生した
理論である。その歴史的背景となった現代を、ゴンパンは、「経済的な
飛躍、青少年の教育課程への大量の流入、かつて人が知ったすべてのこ
とをしごく全体的な要求、量的にすぐれた段階への社会の到達から生ま
れた新しい必要」に特徴づけられる時代、端的にいうなら、先進的なテ
クノロジーの時代、あるいは若干の社会学者の呼び方にしたがうなら脱
工業の時代、と規定する。

長い間、地球上の生活の消費水準は横ばいもので、しかもそれすら
ごく少数の人々のみが享受できる性質のものだった。しかし、現代にお
いては、大衆は、「最少限の必要の満足が考えられる段階に」到達した。
「人類は稀少性の王国から出ることを意識し、自分たちの欲求、すべて
の欲求をしきりに満たそうとする。人に自分の労働の生産物を享受させ
ない障害に対する闘争が、新しい形態を帯びるだろうことは明白である。
社会という面では、それは、社会的闘争が様相と目標とを同時に変

に奇立ちを感じた。政党と組合の官僚機構は、民主的中央集権主義と
称する、当の機構そのものに好都合な中央集権主義に立脚していたが、
それらの機構に特有の欲求と、労働者大衆全般の欲求との間にずれが自
立つようになる。

スターリン主義は、広く受け入れられ、この「要するに束の間の、時
代遅れの政治・社会機構を永遠に固定化」しようとする乱暴な企画を抱
いていたし、共産主義運動は、資本主義諸国においては、「妥協する実
践によってたちまち矛盾をさらけ出す、言葉の上の強硬さだけ」を示し
ていた。ところが、「相対的に豊富な世界、テクノロジー、科学、経済
の前のない変化の世界、かつてない社会学の再編成の世界の中で、労
働運動は自発的に、八量のな闘争の年月が覆い隠していた、もともと
自然な、もともと古くもある、関心を再発見する」。すなわち、労働者
たちは、「闘争の目標を下部で彼ら自身で決めること」、そして「決定
の自治にもとづく正統な社会主義、つまり非集権的な、自治管理的な社
会主義を明日の社会の中で形成すること」を、まだほんやりとだが求め
はじめた。

そこから生まれた社会的紛争の新しい実践が、便宜的に八異議申立て
Vと呼ばれるものである。これは世界的に見られるようになったものだ
が、もともと集中的に、もともと大規模な形では、フランスの六八年五
一六月に現われた。この異議申立ては、経営者、国家権力とともに伝統
的な労働者階級指導部と対立した。「労働者たちは、社会全体の拘束
的な機構と労働者階級指導部の影響力と同時に闘いながら、マルクスな
りレーニンなりよりも、ブルードンなりバクーニンなりの方がよく念じ

えることを意味する」。ゴースムは、そういう時代に呼応するものと
して発生した。

フランスの労働運動は、一八八〇年ごろに組織されてから一九五〇年
代まで、資本主義的蓄積の状況から消費の時代にいたる、歴史の歩みの
跡を追っただけだった。その六十年の間、労働者たちが第一に警戒した
のは、失業、貧困、雇用の弾圧、「要するに稀少性の資本主義経済に
固有の偶然」だった。ここでは組合は、理論的には革命的でも、「野心
的な綱領に反して」いつも改良主義を実践し、前世紀末ごろからマルク
ス主義の浸透を受けていた諸政党が大衆に提供したのは、「革命的イデ
オロギと改良主義の実践」だった。ここでは、大衆自身が闘うこと
は例外的なことで、プロレタリアートは、稀少性の状況の中で当面の経
済的要求を目標として闘うために、その自治権を組合や政党に譲渡して
いた。「それは資本主義市場の現実が、組織と諸決定の集中化を必要と
していたので、それだけに容易な」ことだった。つまり、労働者階級は
資本主義社会の一圧力グループとなったわけで、「圧力グループのすべ
ての属性、指導部、官僚制、階級制、権威主義」をも身につけたのであ
る。「獲得した成果（賃上げ、雇用の安定、社会保障、プロレタリアー
トに有利な法の整備、制度の民主化）は、まさしく資本主義制度の中で
一つの地位を占めようとしている、一階級的要求に応じたものだった」。
しかし、労働者たちがそういう状況に不満を持ちはじめた時代が来る。
およそ五〇年代の初めごろから、フランスが経済的沈滞から脱するにつ
れて、労働者たちの伝統的な指導部（共産党と労働総同盟）は、前例の
ない力を持つにいたっていただけにもかかわらず、労働者たちの新しい要望

ていた、きわめて古い本能を再発見する」。そうして、「事実における
改良主義の、将来の展望における教条主義」の長い年月ののち、多くの
労働者たちは、自分たちの運命と自分たちの事業の指導の責任を、自分
たち自身でとうとうとはじめた。この社会的実践に伴われ、それに追隨
する形で、同じ方向を持つ革命理論も生まれた。それがゴースムであ
る。

ゴースムは、マルクス・レーニン主義への左からの対策であるが、
社会民主主義にも、共産主義の左翼反対派をも否定する。社会民主主義
は、革命的でない。つまり、資本主義社会の即時の全体的な転覆を狙っ
ていないから否定されるし、トロツキスト、マオイスト等々の左翼反対
派は、レーニン主義の源泉に、あるいは共産主義の革命的源泉に戻ろう
としているだけのもの、つまり、マルクス・レーニン主義を裏切ってい
るとして共産党を攻撃しつつ、自分らこそ聖典の忠実な番人であると自
任しているにすぎず、マルクス・レーニン主義への対案の提示者ではな
いから、否定される。（この意味でゴースムは、日本でのいわゆる新
左翼とは全く性格を異にしている）。

二 新しい革命への模索

さて、以上のように、ゴースムとは何か、をいわばその周辺から語
ってきたゴンパンは、ようやくゴースムの内容を語る地点にまで来る。
彼によれば、ゴースムは、「批判であり、実践であり、理論である」。
それはまず、「マルクス主義の修正から革命理論としてのその否定
にまでゆく」批判である。ゴースムによれば「極端に言えば、マルク

スは、ブルジョア革命の潜在的性質を極限にまで推し進めたブルジョア革命の理論家である。組織についてのすべてのレーニンの理論には、政治権力の奪取としての革命の概念そのものにも、ブルジョア思想の刻印がある。したがって、ロシア革命が、階級支配の制度を更に完成させ、集中化させて再生した、国家資本主義の制度に到達したことは、別に何一つ意外なことではない。結局ゴシスムは、二十世紀のすべての革命を社会主義のものとしては認めず、単にそこに最近になって起きたブルジョア革命を見る。

この視点に立つと、現在行われている共産主義と社会民主主義の運動は、社会主義のあるべき姿から逸脱したものであるのではなく、「資本主義の機関、いにかえると、権力より大きな効率とより強力な集中の方向へと資本主義社会を整備しようとする機関」と見なされる。したがって実践としてのゴシスムは、「階級闘争が伝統的な組織による既成の枠を打破した」ところ、つまり「階級闘争が体制と労働者階級指導部との双方に向けられた」ところで行われる。山猫ストライキ、工場占拠、幹部の監禁、既成の組合や政党の枠外での職場や工場や企業を基礎にした組織の結成、更にはゼネラルストライキ、そうした実践は「歴史的なV指導部の——ブルジョアの弾圧の模範を再生する——拘束的弾圧的な性格を暴露する」に違いない。

そして、そのような実践の基礎として求められているのが、理論としてのゴシスムである。そこでは社会主義は、もはや既成社会をよりよく整備してゆくものとしてではなく、「人間のさまざまなグループの自治によって特徴づけられる、より優れた段階」と考えられている。この

ゴシストたちは、革命的な実践の中で、たとえ「見革命的なものだろうと、すべての指導とすべての階級制への本能的な拒否、闘争の自治への志向を示すが、それは彼らが、「社会は、それが自由に建設されなければ、自由ではありえない」という仮定から出発しているからである。そして、このように未来社会のあり方についても革命の過程においても自治の原則を貫こうとするゴシスムは、それゆえに革命の過程の内容についても、従来とは全く違ったものを提示することとなる。

革命過程についての、主として「老いたVマルクスの著作『資本論』と『ゴダ綱領批判』にもとづく正統派マルクス・レーニン主義の見方では、あらかじめ革命的な時空は定められ、革命は「経済・社会体制が十分に成熟し、旧体制がすでに傾向として含んでいた若干の要素を開花させる時、資本主義の発展期の果てに訪れる筈」で、「革命的闘争、大衆の政治組織は、この展望の中で、（特に教育によっての）社会主義到来の準備」をするものとされ、革命的活動の主な場所は、「すべての疎外は経済的疎外から生まれ」「賃金制度を廃棄し、生産財を共有化しつつ、まず廃止しなければならないのは経済的疎外である」から、生産の場とされていた。

しかし、ゴシスムの革命的時空は、もっと限定されない、もっと拡がりを持つものとされる。マルクス主義の経済的進化論は事実にくわがないものとして捨てられる。資本主義経済は確かに多くの矛盾を含んでいるが、しかし体制は、危機を制御することも、自己を生きのびさせることも今日では習得しているのである。資本主義が自動的に崩壊し社会

未来社会について、もちろんゴシストの間では多様な見方の相違があるが、いずれにも一致しているのは自治の原則であり、したがって「權威主義的な、中央集権的な、統制経済的な、計画的な、イデオロギー的なすべての図式は、排除される」ものとして扱われる。そして、ここでイデオロギー的とは、「思想と共同の意志表示の分野での弾圧の現象を意味している」。

ブルジョア文明は、父親の、経営者の、教育の、政治等々の、権威の機構を導入するとともにイデオロギー支配を確立したが、そのやり方を盲従的に踏襲したのが「レーニンを頂点とする革命指導者たち」であり、彼らは「プロレタリアートに、外部から一つのイデオロギー、彼ら自身の解放のイデオロギーを供給しつつ」、イデオロギー支配をはかったのだ。したがってそれを批判する立場に立つなら、「問題は新しいイデオロギーを提供することではなく、すべてのイデオロギーを廃止し、非神秘化すること」におかれなくてはならない。革命を表現するのは、固定的なイデオロギーに指導されるのではなく、つねに実践の過程で自分たちに必要な理論を作りだしてゆく、労働者たちの独立した行動である。

ゴシスムは、社会主義社会を実現させる手段についても、固定的なものを持つとはしない。あらかじめ設定される、したがうべき体系的な図式は拒否される。革命的行動は、「人がより高い歴史の段階に移ってゆく」その過程で、それ固有の闘争形態を創りだす筈だ、とされる。いにかえると「社会主義社会は、すべての段階での自己統治によって特徴づけられ、革命的過程は、自治的な諸闘争の総体からなることとなる

主義に代ることは考えられない。したがって、ゴシスムが重視するのは、革命的自発主義であり、外部から導入されねばならぬものではない、社会主義的意識である。「資本主義の終りは、体制と伝統的革命勢力とともに敵対する、連続した意識的な闘争の結果としてしか、予見されない」。

この革命の見方の中では、革命とは単に経済的疎外の廃止、賃金制度廃止のための闘いではない。ゴシスムにおいては、革命的行動とは「すべての戦線における永続闘争を意味する。問題は、心理的な、性的な、文化的な、イデオロギー的な、そしてもちろん経済的な、すべての疎外を消滅させることにある。闘争の戦線は、そうしてきわめて拡大される。すなわち、革命的過程そのものが、空間と時間の中で、こんどはずっと引き伸ばされるものとなる。その最終的な目標は、すべての権力の廃棄であり、すべての疎外の終りである。それは、一つの蜂起の空間となりうるものではなく、歴史的な一時代すべてを要求するものである」。

三 源流と指針

このようなゴシスムは、ゴンパンによれば、「若干のさまざまな流れの一つの集中点」である。その流れの一つが、スターリン批判以後の、あるいはスターリン批判によって顕在化したマルクス主義批判ないし修正ないし自壊作用だった。

ロシア革命以後、スターリン批判まで、世界の革命運動の指導は、ほぼマルクス主義に独占されていた。そこでは、「閉じられた、科学的な、決定的な体系としての正統Vマルクス主義の、全体主義的な主張」が

君臨していた。マルクス主義は、聖典に公式の解釈を持ち、逸脱と異端とを裁く、聖なる教義だった。特にその聖典とされたのは、マルクス、エンゲルスの後期の著作「資本論」と「反デューリング論」であり、資本主義社会における利益率の低下、資本の集中化、大衆の窮乏化、経済危機の不可避性といった、諸法則の記述が絶対視され、「マルクス主義は、普遍的に有効な経済決定論、社会と社会進化の科学」となり、「革命に成功する機会があるかどうか、ある党が日和見主義的か、軍隊主義的か、それとも単に反革命的か、を十分に判定してくれる法則の総体」となり、それを判定する「大司祭」をも備えていた。しかし、その絶対性、その聖性に疑惑の眼が向けられる決定的な日が来る。一九五六年のソ連共産党第二〇回大会に始まるスターリン批判であり、社会主義諸国の社会主義性を疑わせた同じ年のポーランド、ボズナニでの反政府反乱、更にブダペストでの学生・労働者の反政府蜂起とソ連軍によるその鎮圧、いわゆるハンガリー事件の発生である。

これら一連の事件は、全世界のマルクス主義信奉者に少なからぬ衝撃を与えるが、（ここではフランスのゴシスムが問題なので、話をフランスに限って進めるが）、フランスでもマルクス主義者の中でスターリン主義批判が進められるようになり、スターリン主義のみならず更にマルクス主義そのものも批判の対象になる。それはマルクス主義生成の根源までさかのぼらうとする。いいかえると、「マルクス主義にそれ自身の分析概念を適用すること、マルクスが彼の時代のドイツ哲学の意義を検討した時の、マルクスと同じ作業に専念すること」が問題とされ、それゆえに「若きマルクス」の哲学的著作が改めて注目を集めることとなる。

(一四頁より)

「両者ともに、精神から物質を分離し、精神を物質の単なる反映とする。現代マルクス主義者の唯物論的な概念を攻撃する。上部構造に対する下部構造の優位の基礎にある、この哲学的確証は、弁証法的ではない。なぜなら、一個人の意識的行動は、ルカーチが存在にも意識にも位置する、与えられた過程の客観的な側に位置するからである。この過程のみが、客観的な現実である。なぜなら、その事で主観と客観とが、存在と意識とが統一されているからである。社会的過程の主観と客観は：：「現象の弁証法的相互作用の中にある」。この「哲学論争は、歴史の弁証法の因子ではなく、自律的な因子としての革命運動の評価」に道を開く。「狙われたのは、党のすべての優位だった。なぜなら、歴史の現実を、そしてまず自分らの疎外をとらえ、超えるのは、階級としてのプロレタリアートだからである」。いいかえると、「歴史的進化の中の基本的な要素、それは生産力と生産関係の間の矛盾ではなく、プロレタリアートがそれについて持つ意識である。ところで、プロレタリアートは、それについて直接的な意識は持っていない。彼らはその矛盾を彼ら自身の疎外を通してとらえる。社会変革の決定的な要素は、したがって疎外」とされる。

このように、ルカーチ、コルシュの再評価、更にそこからの発展をも導きだしたフランスにおけるマルクス主義を見直す作業は、初めの目標あるべきマルクス主義、 \wedge 純粹な、初原のマルクス主義 \vee を見出すことを通りすぎ、逆にマルクス主義を \wedge 超える \vee こと、新しい理論の追求にまで進むこととなる。ゴシスムは、その一つの帰結である。

と同時に、一九二〇年代、三〇年代の中頃における「高い理論水準のマルクス批判の伝統」、すなわち、ルカーチ、コルシュ、バナーク、プロッホ、アドルノ、ホルクハイマーらの、「非マルクス主義的な政治的実践としてのレーニン主義の批判、あるいは現代産業社会を説明するのに適しない分析としてのマルクス主義批判」が、新しい脚光を浴びる。このマルクス主義批判、ないし \wedge 正統 \vee マルクス主義批判で特に問題とされたのは、その科学万能的な、経済主義的な解釈である。それによると、先進的な資本主義制度は進化の法則的作用によって自ら社会主義に進むものとされ（エンゲルス『エルフルト綱領批判』）、哲学の分野では、かなり図式的な唯物論となり、そこでは「物質は独自のカタゴリ」、意識はその反映でしかない「絶対」とされた。

レーニンは、この経済主義的な傾向の継承者であり、彼の機械的唯物論は「存在と意識とを全く分離すること、意識を存在の反映とすること、したがって、科学的な社会主義の諸法則を解釈することのできる人々、職業的革命家からでたのではない、独立したものである、あらゆる階級意識を否定すること、を結論としていた。この概念は、永遠の諸法則（教義）をのべることを許し、一括したその受け入れか、その拒否をしか認めない。（この二者択一の後者は、不可避免的に反革命的とされる）。したがってそこに、イデオロギーの全体主義が潜在的に横たわっている」。攻撃されねばならないのは、まさしくこのイデオロギーの全体主義であり、その根底である。そこで改めて評価されるのが、一九二三年における二つの著作、ルカーチの「歴史と階級意識」とコルシュの「マルクス主義と哲学」である。（五七頁に続く）

新しい思想の特徴となるのは、経済的諸要素への偏重との決裂であり、経済的疎外の廃止がすべての疎外を消滅するものではないことが確認され、「事実と科学の進展が資本論の仮説を立証しなかった」ので、経済決定論は捨て去られる。「命令のイデオロギー \vee の種を供給しつつ、階級と人間との意識的な役割を握りつづいた」、マルクスの経済主義に代って、ゴシスムは、「毎日の生活の中での自由を求める、疎外された人間の自由意志」を喚起するのである。

さて、「若干のさまざまな流れの一つの集中点」であるゴシスムは、右に見たマルクス主義の再検討、ルカーチやコルシュからの遺産を重要な構成要素の一つとしているが、また、一九一八―一九年のドイツ、ハンガリーでの流産した革命からは、労働者評議会など新しい実践と組織の種を供給されており、イタリアの工場占拠（一九一九―一九二〇年）、スペイン革命（一九三六―三七年）からは、非レーニン主義的であり、非マルクス主義的な革命伝統の遺産を受け、更には、シュールレアリスム、フーリエ、ブルドゥン、革命的サンジカリズムといった、フランス起源の伝統からも影響を受けているが、その内容については機会を改めることにしたい。

(一) Richard Gombin, *les origines du*

gauchisme, Paris, Seuil, 1971.